SEKISHO GROUP 関彰商事

世界に挑む。次世代につなぐ

昨年フランスで行われたパリ2024オリンピック・パラリンピックに関彰商事のスポーツアドバイザーを務める大岩剛さんがサッカー男子日本代表の監督、さらに社員の東田旺洋さんが陸上男子100メートル、高橋利恵子さんが女子ゴールボールの日本代表として出場した。世界に挑んだ貴重な経験を次世代の若者たちへ「挑戦するメッセージ」として伝えたいと3人が語り合った。

（聞き手は斎藤敦茨城新聞社編集局長）

目標を明確に

Q オリンピック・パラリンピックに出場されて、様々なことをお感じになったと思います。本日は、皆様の経験を次世代に引き継いでくという切り口で話していただきたいと思います。

大岩さんは、サッカー日本代表監督として若い世代の選手を率いて出場されました。チームづくりにおいて重点をおいたことや徹底されたことはありましたか。

大岩 まずは、われわれが目指すべき「オリンピックの決勝戦に行く」という目標を明確にし、チームの目線を上げることがスタートでした。強豪国との戦いを勝ち抜いていかないと最終地点までは行けませんので、強い相手に対してしっかりと準備する、そういうイメージです。

Q 東田さんは日本選手権で2位となって パリの出場権を獲得しました。代表になったときのお気持ちと臨むにあたっての心構えなどを聞かせてください。

東田 日本選手権においては、確実に力を出し切れば結果はついてくると思っていたので、2位という順位を取れたことについては充実感がありました。オリンピック出場にあたって特別な気持ちはなくて、これまで培ってきた経験をもとに力を出し切ろうという気持ちで臨みました。

Q 高橋さんは、今回はキャプテンという重責を担われました。どのような事を意識してチームを率いましたか。

高橋 ゴールボールは若手からベテランまで選手がいますが、年齢や経験に関係なくそれぞれが意見を言い合える雰囲気を大事にしたいと考えました。話し合える関係性をつくっていく中で、自分たちの意見・方向性をまとめていくプロセスは大変でしたね。

これまでの伸び伸び自由に自分自身のスキルを上げていけばいいというプレーヤーの立場から、キャプテンはチーム全体を見なくてはならない。さらには、コーチ陣とのつなぎ役も求められます。その役割の中で、新たな発見もたくさんありました。そして、これらの経験を重ねていくうちに、このチームで強くなりたいという気持ちがどんどん膨らんでいきました。

Q 大岩さんに伺いますが、若い選手を率いるなかでコミュニケーションにおいて気をつけたことはありますか。

大岩 ピッチから離れたフリーな時間では、選手はいつもスマートフォンに触れています。そういうところでの世代間ギャップを私自身が感じていました。ただ、それを削除するわけではなく、今の若い子たちの準備の仕方も取り入れながら、メリハリをつけるように心がけました。

また何ほども話しましたが、目標を高くしていたので、当然要求も高く持っていく。そういうスタンスでいようとはおもいました。コーチングにおいては、選手たちの技術レベルも飛躍的に上がっているので、指導方法も論理的かつコンピューティー、そして全員が理解できるようにシンプルな言葉のチョイスを心がけていました。

幅広い知見

Q 監督やコーチとの関係性はさまざまだと思いますが、東田さんはどういった関係性だと思われますか。

東田 大学の頃から同じ方にコーチングしてもらっていますので、互いに何ということなくやりとりのほうが、選手として成長していけると思います。

Q 高橋さんはいかがですか。

高橋 私たちも選手とコーチは対等にというところを目標にチームづくりを行っているところです。指導という観点においては、ゴールボールは技術としての歴史が浅く、まだ指導方法が確立されていないと感じています。目の見えるコーチと、目は見えないが選手経験のあるコーチで連携するのが理想だと思うのですが、その連携がなかなかうまくいかないのが現状だと感じています。

Q 東田さんは関彰商事に入社してから自己ベストを更新し、パリ五輪出場も決めました。同社に所属、仕事をするようになって変化した面はあるのでしょうか。

東田 入社以前は競技中心の生活スタイルだったこともあり、関彰商事に入社してから業務にも取り組むようになったことは、多少のストレスがありましたが、そういった中で精神的な成長を感じている部分もあります。大きな舞台でも平常心で自分のやるべきことに集中できるようになったと感じています。また、業務を通じて多くの社員と関わるようになり、たくさんの応援をいただけることで、頑張る糧が増えたと感じています。

幅広い知見を取り入れることが良い学びに繋がる

大岩 剛 おおいわ ごう

1972年6月23日、静岡県清水市生まれ
静岡市立清水商業高校－筑波大学卒業
2020年 関彰商事㈱スポーツアドバイザー就任

1995年にプロデビュー。名古屋、磐田、鹿島アントラーズを経て、2011年に現役引退。2017年に鹿島アントラーズの監督、2021年にはU-18日本代表監督に就任。2024年パリ五輪予選を兼ねたAFCU 23アジアカップでチームを優勝に導き、出場権を獲得。パリ五輪ではベスト8入りを果たした。また昨年10月には史上初2度目のアジア最優秀監督賞を受賞、12月には2028年ロス五輪世代の代表監督就任が発表された。

2025年の目標 次のロス五輪に向けた良い準備期間となる1年にしたい

大岩 なるほど、よくわかります。サッカーの世界だと、海外ではプロの組織として100年以上経っていますので指導においても確固としたスタイルが確立しています。一方、Jリーグは発足して30年ですので、まだまだ世界のレベルには差がありますが、海外チームや団体とやり取りをしながらレベルアップしたり、指導者を養成する機関があったりします。そういった体制になるまでには、歴史というか月日が必要なのかなと思いますね。ゴールボールもその積み重ねが必要な時だと思います。今では他のスポーツのみたちがJリーグに結構来ますよ。

高橋 指導者が学びに来るんですか。

大岩 そうです。指導者を養成する仕組みなども、他のスポーツに比べて進んでいるJリーグを参考にしようとする他のスポーツ組織は多いですよ。ゴールボールの関係者もぜひ学びに来てください。

高橋 ありがとうございます。学ぶことがたくさんありそうですね。

大岩 サッカーの指導者ライセンスを取るために受講する講義の中にはコーチングや心理学もあれば、解剖学や異業種の方の話などご一見サッカーに関係がないと思う分野もあります。

変わったものだと、オーケストラの指揮者の方の講演を聞く事があります。実は、サッカーの指導者の役割と似ていて、それぞれの楽器の奏者をまとめる点において効果的なアクションを取使しています。そういったことをはじめ、サッカーの専門知識だけではなく幅広い知見を取り入れることが良い学びに繋がるものと思っています。

Q もともとゴールボールは視覚障がい者のリハビリのために考案され、1976年にパラリンピックの正式種目になったと伺っています。高橋さんは、競技という点でゴールボールをどのように捉えていますか。

高橋 もともとの原点のパラスポーツは福祉から始まっていて、競技が高まり始めたのが2010年ごろの事です。ですので、まだまだ福祉的なイメージで捉えているコーチや指導者の方も多いという印象です。そのような中、ゴールボールは身体能力やフィジカルの強さも求められるなど競技性が高いため、世界で勝っていくためにはスポーツとして通用しなければならないと感じて活動しています。そのためには、サッカーや陸上などはじめ、他の競技団体の皆さんにもご意見やご指導を頂いて、より強い組織の構築とチーム運営に生かしていければと考えています。

基準が一つ上に

Q 東田さん、チーム競技と個人競技だとかなり違いがあるという印象なのでしょうか。

東田 リレー種目はチーム競技ではありますが、とはいえ個人競技的な側面がありますね。ミスをしたら、キャプテンもいますが、一チームとの橋渡しをするということもやく。基本的には個人個人がコーチと話し合うという形なので、リレー種目であってもチームという感覚は薄いです。また陸上競技は、ライバルとなる存在であるのでチーム競技とは求められるものも全く違いますね。

Q 東田さんは2度目のアジア最優秀監督賞を受賞、12月には2028年ロス五輪世代の代表監督就任が発表されたと伺いますが、はいかがでしょうか。

東田 今回の経験から明確に変わったことは、自分の中で基準が一つ上がった点です。日本国内の大会においては、9秒台で走る選手はほとんどいませんが、オリンピックでは当たり前のように9秒台で走る選手がたくさんいました。そういった選手の細かな動きやスピード感を目の当たりにして、今までぼんやりしていた9秒台で走るための要素・基準が明確になった感覚がありました。

Q ゴールボールは6位という結果でしたが、悔しさを糧に気つき、学ばれたと思いますが、いかがでしょうか。

高橋 東京大会で銅メダルを獲得して、パリ大会では金メダルと意気込んでいたのですが結果は6位で終わり、これまでに感じたことのない悔しさを覚えました。正直、今でも思い返すと胸がチクチクします…。結果が出せなかった原因の一つとして、視野が狭かったのかなと感じています。先ほど大岩さんから話があったように、もっと選手やコーチのことを学んだり、海外のゴールボールのことを学んだりし、幅広い視野を広げていきたいと思っています。そして、次のロス大会でのメダル獲得に向け、やるべきことを課題を明確にして、チャンピオンシャーの立場から挑んでいきたいと思います。

今ごのように考えている自分がいるのは、6位にならなければ得られなかった感情なので、それを前向きに捉えたいと思っています。

悔しいと思う気持ちが自分を奮い立たせる原動力に

高橋 利恵子 たかはし りえこ

1998年3月20日、広島県広島市生まれ
筑波大学附属視覚特別支援学校－筑波大学－筑波大学大学院修了
2022年 関彰商事㈱入社 総合企画部 所属

先天性の網膜黄斑変性により、幼い頃から視覚障害がある。支援学校高等部在学時に体育教員から人数合わせでの参加を勧められオリンピックに出会う。2018年、日本代表強化指定選手に選出。2021年には東京パラリンピックに出場し、銅メダルを獲得。パパラリンピックでは、キャプテンとしてチームを率い、6位入賞で大会を終えた。

2025年の目標 アジアパシフィック選手権に出場し、世界選手権への切符を獲得する

Q スポーツも多様化してきている中、子どもが自分に合ったスポーツの見つけ方はあり得ますか。

東田 身体的な発育から考える競技の適性はあると思いますが、やはり本人が興味を持つものの適性かなという感じはします。子どもの段階では、何が好きとかっていうのを言語化はできないと思いますが、本人なりに好みや出来そうだと思って取り組み始めると思うんですよ。なので、本当に本人がやりたいものをやらせてあげたらいいじゃないかなとは思います。

高橋 私自身も鳥取ゴールボールと出合いましたが、身体的な特徴だけでいったら、違うスポーツのほうが合っていたのかなと思ったこともありました。ただ、まずは好きになることが努力や継続を可能にすると思うので、そういうスポーツに出合えたらそれが自分に合ったスポーツだと思います。興味をもとに色々とやってみて、合うものが見つけられたらいいんじゃないかなって思います。

大岩 私はちょっと違う目線で言うと、親が介入しすぎないことが大切かなと思っています。介入するとどうしても親目線になってしまうことが多々あります。子どもは自分のレベルを自分で知ります。子どもは「もっと頑張れ」と言っても状況次第では頭張れなくなってしまうことがあるのです。私自身も、小学校の頃にサッカーを辞めざるを得ない時期がありました。全然うまくいかなかったし、うまい子がいっぱいいるし、でも1カ月、2カ月たったら、また自分から進んで練習に行ってました。そういうときが一番伸びる。結局は自主的に判断して動いた子がいちばんいいなと思ったから、親としては、子どもが自分で判断して、親は子どもとの距離感を意識することです。練習したいときと、ボール蹴りたいという瞬間が一番伸びるのです。親が介入せず放っておくことが大切です。

あきらめずに「継続」したからこそチャンスをつかめた

東田 旺洋 ひがしだ あきひろ

1996年12月13日、奈良県奈良市生まれ
奈良市立一条高等学校－筑波大学－筑波大学大学院修了
2023年 関彰商事㈱入社 ヒューマンケア部 所属

小学生時代に身体強化のために参加した地域の陸上クラブがきっかけで陸上を始める。2019年、日本インカレ100mで優勝。2024年には、パリ五輪代表選考会を兼ねた日本選手権の男子100mで2位に入賞し、出場権を獲得。パリ五輪では10秒19で準敗退となったが、スタート反応速度は出場選手72人中トップを記録した。

2025年の目標 世界陸上で再び100m日本代表としてスタートラインに立つ

集中が緊張を解く

Q 3人とも大きなプレッシャーの中で出場していたと思います。それをどのように乗り越えたのか聞かせてください。

大岩 乗り越えるというか、プレッシャーだらけです。選手ももちろんガチガチで試合前は顔もこわばって。でも、何にプレッシャーを感じているかを考えると、周りの声なんです。我々にとって、その声に応えることが課されたタスクではない。だから、金メダルを目指すんだと、ファイナルに行くんだと、われわれのチームとして目指すべきものを明確にしました。要はターゲットを明確にすることです。

目の前にフォーカスを当て、集中することで私自身も選手もプレッシャーに対峙しました。

高橋 実は、私自身プレッシャーにとても弱くて、以前、緊張して思うようなプレーが出来なかったときにチームメンバーから「高橋さんらしくなかった」と言われたことがありました。その時に自分は「選ばれて来ているのに、この舞台で緊張して空回りして終わったらもったいない」と思い直し、最後は自分らしくプレーしたいという ふうに開き直りました。パリパラリンピックではそこをずっと意識しました。なかなか経験できる場ではないので、せっかくなら楽しもうって持ってしたね。

大岩 自分の身体って分かっているようで意外と分かってないときはありますよね。メンタルにも言えることですが、人間の身体の不思議なところです。なので、高橋さんがさっき言ったように「高橋さんらしくなかったよ」と言ってくれる人の存在はとてもありがたいことだと思います。いわゆる気づきを与えてくれる存在です。結局は、人とのつながりがプレッシャーの克服にヒントをくれたりするものです。

東田 基本的にプレッシャーは人の目というが、どう思われるかに尽きる意識に左右される部分が大きいと思います。良い結果が出て、応援してくれる方に喜んでもらうことはもちろんうれしいですが、結果が出なかった時に残念な気持ちにさせてしまうと考えると硬くなります。自分のやらなければいけないことを明確にする必要があると思っています。試合のときは走るだけ。走った結果がどうであれ、自分はやるべきことをやったので自分は悪くないと、正当化する感じです。自分の責任を明確にしていれば、そこまでプレッシャーに感じる必要ないと思います。

高橋 ちなみに走ってる約10秒間って何かかぶってますか。

東田 何も考えてないですね。考えているときは大体、足が遅いときです。

高橋 良いタイムがでるときはどんな状態ですか。

東田 自分を客観視しているときは速いです。さらには、走っているか、走らされているという感覚になるんです。体が勝手に動いているので、無駄な緊張やストレスがない状態で力みなく動いているので、大体良い結果に結びつきます。

Q 東田さんは理論立てて走ることが得意と伺いました。子どもが速く走るためには、体をやみくもに動かすというよりも、理論を頭に入れたほうが良いですか。

東田 はじめに、自分の体を正確に把握できてないということがよくあります。それは悪いことではなく、単純に成長が早過ぎて自分の手足の長さとか身長が感覚などにズレが生じてくるのです。そのせいで、どうしても速くなれない・運動が上達しない時期は間違いなくあります。そういったときは、マイナスに考えずに継続するだけでいいと思います。その状態で結果を求めようとすると、ケガをしてしまったりするので、感覚が自分の体に追いつくのを待つことも必要だと思います。また、いろんな環境を用意してあげることと、正解を教えてあげるということも大事だと思います。正解を見せてあげるというのは、僕がオリンピックで9秒台の選手の走りを見て答えを知ったように身の回りから正解を知ることです。あれが正しい動きだと思ったら、そういう動きを模倣することが大事だったりします。

Q スポーツにおいて自分に合ったスポーツの見つけ方はあり得ますか。

東田 身体的な発育から考える競技の適性はあると思いますが、やはり本人が興味を持つものの適性かなという感じはします。子どもの段階では、何が好きとかっていうのを言語化はできないと思いますが、本人なりに好みや出来そうだと思って取り組み始めると思うんですよ。なので、本当に本人がやりたいものをやらせてあげたらいいじゃないかなとは思います。

高橋 私自身も鳥取ゴールボールと出合いましたが、身体的な特徴だけでいったら、違うスポーツのほうが合っていたのかなと思ったこともありました。ただ、まずは好きになることが努力や継続を可能にすると思うので、そういうスポーツに出合えたらそれが自分に合ったスポーツだと思います。興味をもとに色々とやってみて、合うものが見つけられたらいいんじゃないかなって思います。

大岩 私はちょっと違う目線で言うと、親が介入しすぎないことが大切かなと思っています。介入するとどうしても親目線になってしまうことが多々あります。子どもは自分のレベルを自分で知ります。子どもは「もっと頑張れ」と言っても状況次第では頭張れなくなってしまうことがあるのです。私自身も、小学校の頃にサッカーを辞めざるを得ない時期がありました。全然うまくいかなかったし、うまい子がいっぱいいるし。でも1カ月、2カ月たったら、また自分から進んで練習に行ってました。そういうときが一番伸びる。結局は自主的に判断して動いた子がいちばんいいなと思ったから、親としては、子どもが自分で判断して、親は子どもとの距離感を意識することです。練習したいときと、ボール蹴りたいという瞬間が一番伸びるのです。親が介入せず放っておくことが大切です。

企画制作・茨城新聞社営業局

関彰商事株式会社
つくば本社 / 〒305-0051 茨城県つくば市二の宮1-23-6
下館本社 / 〒308-8512 茨城県筑西市一本松1755-2
セキショウ www.sekisho.co.jp
セキショウアスリートクラブ「ONE」 www.sekisho.co.jp/athlete/
本年もよろしくお願い申し上げます